

『不寛容という不安』

2017年12月11日

評論家、著述家の真鍋厚氏が『不寛容という不安』を上梓している。日頃から、疑問に思っていることに回答を聞いたようで、目の開かれる思いがした。現代社会の文化状況を、広範囲な歴史的視点から論述し、その説得力に敬服した。

日本に住む多くの人は商品やサービスが手軽に入手でき、情報は飛躍的に手軽に享受できるが、砂を噛むようで味気なく、将来への不安に晒されている。その中で、排外主義や人種主義、性差別主義が大幅に台頭し、他者に対する配慮を欠いた「不寛容」の風潮が吹き荒れている。「薄いガラスのような恐怖」に苛まれている現状分析から書き始めている。

真鍋氏は「社会を覆っている『不寛容』は、紛れもなくわたしたち自身の『不安』を宿主にしているのだ」と言う。確かであろう。不安が募り、不寛容を醸成し、それが、コントロールできずに、他者への理由のない憎悪、攻撃を生み出す。相手を誰彼問わずに、危害を加え、殺す事件が起こっているが、「居場所」を失い、生きづらくなった不安が犯罪へと駆り立てるのである。

戦後の日本は急速に工業化し、核家族化が進んだ。最近のグローバル化の進展が産業構造の急激な変化と雇用の不安定をもたらし、貧富の格差が増大している。家族に守られる、また、地域共同体で保護されるというような「居場所」をなくし、分断と孤立は深刻さを増している。社会的孤立による不安や不満がスパイラルに落ち込み、「何もかも、ぶち壊せ」というネガティブな感情へと駆り立てる。この不安が他者への差別的なヘイトスピーチやテロリズムなどの野蛮な行為へとつながっていく。他者を受容する寛容な精神を喪失しているからである。私は社会の被害者への暖かい支援が必須のことだと思っているが、加害者への理解を深めることも、同じように大切ではないかと思っている。

真鍋氏はテロリズムも同根であると指摘している。大江健三郎氏の『セヴンティーン』は浅沼稻次郎を殺害した少年をテーマにしている。少年は死の恐怖に怯えていた。死の恐怖とは「生の不安」である。彼は皇道派の演説を聞き、「ああ、天皇よ、天皇よ、あなたはわたしの神であり、太陽であり、永遠です。わたしはあなたによって真に生きはじめました」と叫ぶほどの、極右集団に埋没していく。天皇を神とする信仰共同体への自己同一化と忠誠によって、生の不安から脱却したのである。IS（イスラム国）のテロリズムは常軌を逸するものである。米国を中心とした有志連合軍によってイラクは崩壊させられた。それ以前にも、西欧文化、文明によってイスラム諸国は屈辱を受けてきた。彼らの怨念には深いものがある。一気に噴出し、世界をテロの恐怖に陥れた。2015年のテロによる死者は約3万人である。イラク戦争による民間人の死者は、一説には60万人にも達すると言われ、アフガニスタン、パキスタン戦争、また、シリア内戦のロシア軍による空爆による死者を加えれば、更に増大する。テロとは何か、テロリズムを起こす原因を問う必要がある。真鍋氏は、近現代史における欧米による植民地政策の実態を披瀝し、地獄のような「途方もない暴力と収奪」が、欧米の豊かな社会を築く起点になっていると言う。

アウシュビッツから帰還したフランクルは、「人間の苦悩、人間の人生の究極的意味への問いに対しては、もはや知的な答えはあり得ず、ただ実存的な答えしかあり得ないからです。われわれは言葉で答えるのではなく、われわれの現存在そのものが答えなのです」と書いている。真鍋氏も「まずは自分と他者との関係性を、具体的な行動から実りあるものにしていかねばならない」と書いている。現存在を見つめ、具体的な関わりを持つところに「居場所」を得て、アイデンティティが確保されていくのではないかと。